
Detective Cat

天海 沙月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D e t e c t i v e C a t

【Nコード】

N 8 8 5 8 A

【作者名】

天海 沙月

【あらすじ】

ある日、僕が出会った引きこもりの天才少女、クロ。そんな彼女は時にこう呼ばれる 『黒猫』と。

第一話：クロとシロ

困った。どうするべきか。

『氷鉋黒羽』という文字と、簡易地図の書いてある紙を持ち、さつきから二十分はこの辺をうろつろしている。僕の目の前に広がるのは、巨大と言って差し支えない程の、邸宅。

『氷鉋』という苗字が読めないのだが、表札とは一致しているし、珍しい苗字だから、この家で間違いではないだろう。

北海道に転勤してきた僕は、娘にもう一度学校に行かせるためにも、会ってやってくれと言われ、父さんの知り合いの引きこもり娘に会うために、ここに来た。

地図を見ながらここまで来たは良いものの、家のあまりの大きさに、チャイムを押すに押せないのだ。

しかし、何時までも迷っている訳にもいかず、勇気を振り絞って、恐る恐るチャイムを押してみた。

「はい」

即座に、女の人の声が返って来た。

当たり前前の現象だというのに、インターホンから返って来た声にびっくりとする。恐るべし、豪邸。

「た、立森です」

「ああ、志狼君ね。今開けるわ」

カチャン、と軽い音を立てて、門が開いた。もちろん、自動だ。

「あの子の部屋は、二階の上がって直ぐだから」

インターホン越しの声に従って、階段を上がる。しかし、豪華な階段だな。

二階の廊下は、ものすごい部屋数があり、あまりの広さに、突き当りが見えない。

階段を上がって直ぐの部屋……と、あったあった。扉に小さな黒猫のプレートがかかっている。

扉の前で、僕は再び躊躇した。

初対面の人間と話すのはあまり得意じゃない。その上、どうやらそのひきこもり娘は天才らしい。天才は、何となく苦手だ。

コンコン、とノックを試してみた。返事は無い。

「入りますよー」

聞きなれない声に驚いたのか、中の人物が動くのがわかった。

中に居たのは、何処か神秘的な印象のある、少しウェーブのかかった、長い黒髪の少女で、積み上げられた本の中に座っていた。

真っ白い肌は良く言えば白磁、悪く言えばモヤシっ子。

「はじめまして。立森志狼です。ええと、ひ、ひ……」

『氷鉋黒羽』と書かれたメモを見ているのだが、正直に言おう。

漢字の読みがわからない。

「ヒガノクレハ」

「あ、ども」

結局、相手に読み方を教えてもらう結果となった。

氷鉋はヒガノと読むらしい。

「へえ、黒羽でくれは、って読むのか……ややこしいな。クロで良い？」

瞬間、無表情だった相手の顔が、豹変した。目を見開き、信じられないものを見るように、僕の方を見ている。その顔から読み取った感情が合っているのなら 99%合ってるだろうけど 『なんだこいつ』。

「いいじゃん、クロ」

「良くない」

「その内馴れるって」

言うておくが、僕は普段初対面の人間にいきなりニックネームをつけるような、フレンドリーな奴じゃない。それなのに不思議と、クロとは話し易かった。

「……じゃあ、そっちはシロ」

「へ？」

「シロウだから、シロ」

うーん、いざ、自分にニックネームがつけられるとなると、抵抗があるな……。

「はい、決定。それで、シロは何の用？」

僕の葛藤など気にも止めず、ニックネームはシロと決定されてしまった。くつ、こつちだつて、クロに決定だ！

「用つて……別に、君のお父さんと僕の父さんが知り合いで、同い年の子供がいて、引きこもりだから会つてやつてくれ、って」

僕の答えに、クロは少し驚いた顔をした。

「『黒猫』関係じゃないの？」

「なんだそれ。あ、これケーキ」

差し出したケーキ箱に、クロは興味を示したが、それも一瞬の事で、

「生クリームはキライ」

この、折角買ってきたのに！どうすんだ、僕は甘いものは苦手なんだけど。

「冷蔵庫にでも入れといて。下にあるから」

そう言つて、本の山のとっぺんから辞書のようなハードカバーを取つて読み始めた。

あれか、これは。本読んでるから冷蔵庫にケーキを置いてこいと云つてゐるのか。

「早く」

わかりましたよ、行けば良いんだろ！

以外と早く打ち解けられたが、ちよつとばかり打ち解け過ぎの気がする。会つて五分の人間に命令するか、普通。

とりあえず一階に下りたが、何しろ家が広すぎるので、誰かに訊く事にする。

「あ、すみません」

「何？」

きちんとした出でたちに、バッグを持った女性。氷鮑さん　ク

口のお母さんだった。

「冷蔵庫って、何処にありますか？ケーキを持って来たのですが、生クリームは苦手みたいで」

「あら、どうもありがとうございます。冷蔵庫は左を真っ直ぐ行った所にある、居間の奥よ」

僕は礼を言い、歩き出そうとした。

「出かけられるんですか？」

「ええ。急の仕事で」

クロの両親はとにかく忙しい人だと聞いていた。

母親は仕事で家を開ける事が多く、父親に到っては、滅多に家に帰らないという。

「そうですか。お気を付けて」

「ありがとうございます。行ってきます」

見送りをすませると、僕は、居間に向かった。

またもや、広い居間。ただ、奥にあった冷蔵庫は、意外に普通の大きさだった。

この家に住まうのは、クロの家族三人と、メイドが一人で、食事をするのはクロとメイドだけだというから、それも当然と言えば、当然だ。

こんな広い家に、何時もたった二人なのか。

僕は、冷蔵庫を開けた。綺麗に整理整頓されている。

一番に、『きのこの山』が目に入った。しかも三箱。明らかに買すぎだろ。

僕はケーキをしまうと、再びクロの部屋へ向かった。

「遅い」

いきなりその台詞はないだろうと思うのだが、どうか。

「好ききらいすると、大きくなれんぞ」

座っていてわかりづらいが、クロは小柄だった。僕もあまり背が高い方じゃないけれど、それでも僕より小さいと思う。

「木登りするような、幼稚な奴に言われても」

「木登りは関係ないだろ……って、何で知ってたんだ」

木登りをしたのは、本当だ。ただし、木に引つ掛かった友人の帽子をとってやる為であって、断じて遊んでいた訳じゃない。

それより、そんな事を言った覚えはないのだが。

そんな僕に、クロはいとも容易く言っただけだ。

「まず、指が少し茶色い。良く見ると、顔やズボンにも付着してる。それから、葉っぱ。最初に来たとき、上着に葉っぱが付いてた。まだ若い葉だから、登りでもしないと、付くことはない……って訳」

まるで探偵のようだ、と思った。台詞の後ろにQ.E.D（証明終了）と付ければ、さぞかしそれらしい事だろう。

「当たり前？」

「……正解」

それが、僕と『黒猫』、クロの出会いだった。

第二話：ヴァイオリン演奏会

「ああ、志狼、もう一度氷^{ひがの}鮑のお嬢さんに会ってくれないか」

父さんは帰るなり、僕にそう言った。

「『つかみはOK』だそうだ」

「はい？」

何の事だ。

「黒羽さんは、相当に人が苦手らしいのだが、お前を気に入っていただけでな」

それは、使用人としてという事だろうか。

「ついては、ここに都合よくチケットが二枚！」

効果音でもつきそうなくらいに勢いよく、父さんは二枚のチケットを取り出した。

「ヴァイオリン演奏会のチケットだ。付き添いとして、氷鮑家のメイドさんも」

しかし、さきほどとは打って変わって真面目な顔になり、声音を低く落として、父さんは一つ、釘を刺した。

「その日ばかりは、事件にならなければいいがな」

*

「クロ、入るぞ」

ノックをしたが、前回と同じように、返事はない。

「ヴァイオリンのコンサートが……」

「知ってる。そのヴァイオリニストは小織さんの知り合いだから。直に会えるわよ」

へえ、会えるのか。

小織さんとは、氷鮑家のメイドさん、小織^{こおり・たまき}璋さんの事だ。ずっとクロの世話をしているのだから、きつととても人間の出来た人なの

だろう。

「ほら、昨日のリベンジ」

僕は、クロにお菓子の包みを渡した。

中身は、おかきだ。

こついうお菓子は好みらしく、クロはおかきに手を伸ばしたが、

一口齧って、顔を顰めた。

「辛い」

一体何が好きなんだ、お前は！

それに、そんなに辛いのか？このおかき。

確かに表面に唐辛子が付いているが、ほとんど感じられない程の、辛味だった。

まあ、僕が辛党だからかもしれないけれど。

クロはおかきにはもう、目もくれず、本を読み出した。昨日のハ
ードカバーは読み終えたらしい。

クロが本を読み出して暇なので、コンサートのチケットをじっくり見てみた。

「なになに、若き天才、18才のヴァイオリニスト西川夕希……そ
りやすごいな」

僕らは14だから、たった四才しか変わらないのだ。

「でも、出た杭は打たれるものよ」

これはまたネガティブな、とその時は思ったが、後になってこの
言葉を思い出すと、クロはこの時既に、その後起こることを知って
いたのではないかとさえ思えた。

「璋さん！久しぶり」

演奏会当日。僕らは早めに来て、控え室入りする西川夕希と、そ
の友達や付き人の一団を待っていた。

小織さんと夕希さんが知り合いというのは本当らしく、会うなり、

朗らかに談笑を始めた。

しかし、小織さんは一体何歳なんだろう。

夕希さんは18歳だが、小織さんはどこその有名大学を卒業しているらしく、少なくとも20代だ。

けれど、夕希さんと話す小織さんは、18歳の少女のようにも見えるし、たまに見せる落ち着いた雰囲気は、ずっと年上の女性にも見える。

「紹介するわ、夕希さん。お仕えしている家のお嬢様の、氷鉋黒羽ひがのくればさんと、お友達の立森志狼君」

僕は軽く会釈をする。

クロも頷くように、微かに会釈をしたものの、どこまでもマイペースに、西川さん達を観察している。

今日のクロは、よそ行きの黒いスリーピース姿に、首に小さなベルのついたチョーカーを着けていて、それが何だか猫の首輪のようだった。

「よろしくね。こっちも左から順に、友達の川前良樹さん、薬学部で勉強中よ」

「よろしく」

なかなか気のよさそうな、男の人だった。薬学部らしく、眼鏡をかけている。

「次が、新藤武彦さん。お母さんのお兄さん……叔父さんね」
「どうも」

新藤さんは中年の男性で、煙草を口から離し、挨拶する。ここまでの運転手役を務めていたらしい。

「そして……お母さんであり、マネージャーの西川由衣」
「こんにちは」

何だか、プライドの高そうな女性だった。しわ一つないスカートが、几帳面な性格を現している。

西川さんは、その几帳面な性格から、兄の新藤さんの服装を注意する。

「兄さん、もうちょっと良い格好してきてよ。だらしない」

「うるさいな」

二人はあまり仲が良くないようだ。几帳面な西川さんと、見た目からルーズそうな新藤さんでは、兄妹といえど、確かに相性は悪そうだ。

「あの二人は何時もこうだから気にしないで　それにしても、今日は暑いわね」

夕希さんは、バッグから水色のハンカチを取り出すと、額の汗を拭った。

「そろそろ控室で着替えてくるわ。また後でね」

そう言つて、夕希さんは本番用ドレスに着替えに行った。

まだ開演には時間がある。僕はクロと小織さんとで、建物の中を適当にうろつくことにした。

「クロ、随分おとなしいな」

「そう？　普段はこんな感じよ」

そういえば、クロは人が苦手なんだったか。僕からはとてもそんな風には見えないが。

「ふざけないでよ、兄さん！」

「ふざけてなんかいない！　お前のやり方は横暴過ぎると言っているんだ！」

西川さんと新藤さんの声だ。うわあ、完璧に喧嘩になっている。

「そういえば、小織さんは何処で夕希さんと知り合つたんですか？」

「昔、少しヴァイオリンをたしなんでおりまして。私が先輩で、夕希さんが後輩だったんです」

「そうなんですか。今はやってないんですか？」

小織さんは、何故だか少し哀しそうに微笑んだ。

「ええ、今はあまり。昔、少し腕を怪我してしまって……」

「そうだったんですか……」

その場に訪れた、どこか重たい空気を振り払うように、小織さんは明るい声をだした。

「そうだ、夕希さんの控え室に行ってみませんか？もう本番用のドレスになっっていると思いますし」

僕は夕希さんの控え室に向かったが、人生そう甘くはなかった。「迷った……」

さっきから、ぐるぐるとずっと同じところを回り続けている。

クロならば場所がわかるのではないかと思ったが、さっきからずっと二ノ宮金次郎スタイルで、本を読みながら歩いているので、助言は期待出来そうに無い。

さっきから何分経っているだろう。もう始まってしまっくんじゃ……。

「あ、夕希さん」

その時、ちょうど、女子トイレから夕希さんが出てきた。手を振って水を切っている。

「良かった……迷ってたんですよ」

「あはは。広いもんね、この建物」

「それが本番用ですか？」

夕希さんは、ノースリーブのシックなドレスを着ていた。後ろにチャックの付いているタイプで、胸のコサージュが洒落ている。

「ええ、そうよ。もうすぐ開演だから。そうだ、終わったら控室に来てくれない？ここで会ったのも何かの縁だし」

「いいんですか！？是非行きます」

「ありがとう。それじゃあね」

そして、開演に向けて、僕らと夕希さんはその場を離れた。

本番の、幕が開けた。

ヴァイオリンを持った夕希さんが、ステージの真ん中へ出てきた。さつきまで普通に会話していた人が、今ステージの上に立っているとは、何だか変な感じがする。

夕希さんは、ヴァイオリンを左肩で支え、弓を構える。

そして、弓と絃が触れた瞬間、花が開くように、弦楽器の音色が流れ出した。

「すごい……」

僕は驚嘆のため息をついた。

「また腕を上げたみたいだね」

そういったのは、夕希さんの友人である、川前さんだった。

この場にいるのは、僕とクロ、小織さん、川前さんの四人だった。西川さんはマネージャーとしての仕事があるのか、ここには居らず、新藤さんも、クラシックは苦手なので、外に出ている。

「そうかしら」

クロが、僕と川前さんの感想とは違った意見をもらした。

「あの人、あまり楽しくなさそうだわ」

小織さんも、首を傾げている。

それから、二時間半余りが経ち、夕希さんの演奏会は大成功に終わった。

僕らは早速、夕希さんの控え室へ行く。

「あれ？どうしたんですか」

僕らが見たのは、控え室の前で難儀している、夕希さんの姿だった。

「ああ、皆……控え室の鍵は何時もお母さんが持ってるんだけど、見つからなくて……」

「どうしたんだろう。守衛室で合い鍵を借りてきます。」

言うやいなや、川前さんは守衛室へ向かった。

「もう、お母さんだったらどこ行っちゃったのかしら」

僕はドアノブを押してみた。確かに鍵がかかっている。

三分ほどして、川前さんが戻ってきた。

「借りてきましたよ」

鍵を、鍵穴に差し込む。

「！！」

そこには、夕希さんのお母さん 西川由衣さん、いや、西川さ

んだった死体が倒れていた。

第三話：アリバイ（前書き）

登場人物表

・氷鉋黒羽 ひがの・くれは 通称クロ。半引きこもりの天才少女

・立森志狼 たちもり・しろう 通称シロ。語り部。

・小織樟 こおり・たまき 氷鉋家のメイド。夕希の知り合いで、昔ヴァイオリンをやっていた。

・西川夕希 にしかわ・ゆき 18才の天才ヴァイオリニスト。

・西川由衣 にしかわ・ゆい 夕希の母であり、マネージャー。

・川前良樹 かわまえ・よしき 夕希の友人。薬学部で勉強中。

・新藤武彦 しんどう・たけひこ 夕希の叔父で、由衣の兄。由衣とは仲が良くない。

また、「氷鉋」ひがのが読めない、という意見を頂きましたので、一話のクロとの会話以降、振り仮名を入れてあります。

第三話：アリバイ

「きゃああああ」

夕希さんが悲鳴を上げた。

川前さんも、そこに倒れている人間が、もう生きてはいないことに、遅れて気づく。

僕は、倒れている西川さんの手を取った。

「脈が無い」

念のため、口の上に手を当ててみるが、息遣いは感じられなかった。

その時、首筋にくつきりとついた、紐の痕が目に入った。明らかに、死因は絞殺だ。

僕は部屋の中を見回す。まず、西川さんの直ぐ後ろで扇風機が回っている。実際、西川さんの頭はスイッチのついている扇風機の足の部分にあった。

床は、ぐっしりと濡れている。飲み物を零したらしく、ミネラルウォーターのペットボトルが転がっていた。

テーブルの上には、食べかけらしいケーキと、フォークがある。

だが、僕が目を読み寄せられたのは、テーブルの上にある、鍵だった。大きなウサギのマスコットが付いている。

窓は閉められ、鍵がかかっている。それも、北海道なので二重窓だ。他の部屋に通じる扉は見当たらない。ということは……密室？

「慣れてるの？」

いきなり、クロに声をかけられた。

「こういう状況、慣れてるの？」

「え？」

「例えば、夕希さんと川前さん。あんな風に、悲鳴の一つでもあげて、取り乱すのが普通よ。脈を確かめに行った上に、状況確認だなんて、あまり普通の行動とは言えないわね」

……しまった、つい癖で。

「まあ……慣れていると言われれば、多分」

「ふうん」

僕は、いわゆる『事件を呼ぶ男』のタイプだ。事件召喚体質ならびに、事件邂逅体質。

とはいえ、さすがに殺人事件に出くわす事は滅多にないが。

「私のもう一つの呼び名を教えてあげる。『黒猫』。こういうのが専門の、探偵よ」

クロはそう言って、小織さんから手渡された手袋を、手馴れた仕事で、きゅ、とはめた。

一瞬、こういうのが専門の探偵とはどういうことか、と考えたが、
「そういえば、新藤さんはどうしました？」

と、小織さんに言われ、初めてこの場に新藤さんがいない事を思い出した。

「僕が探してきます」

前川さんが立ち上がった。

「では、私が警察を呼びますね」

小織さんが携帯のボタンを押す。

警察が来るまで、素人である僕がすることは特に何もないように思う。

「おい、クロ、なにしてんだ」

クロは手袋をはめた手で、遺体の背中側のシャツをめくっていた。

「見て。死斑が出てる」

見ると、西川さんの背中に、紫色の、薄い斑点状のものが出ていた。

続いて、クロは遺体の顎と首筋に触れる。

「死体硬直は始まっていないわ。死斑が現れるのが死後1〜2時間後、死体硬直が2〜3時間だから、西川さんは死後1〜2時間つてところね」

死後1〜2時間という事は、1〜2時間前に亡くなったということ

とだから、それは丁度、夕希さんがヴァイオリンを弾き、僕らがそれを聴いていた時間帯だ。

誰にも犯行は不可能……いや、それは違う。

新藤さんは夕希さんの演奏を聴いていないのだ。

しばらくして、警察が到着した。

恰幅の良い体格をした刑事さんが、クロの姿を見て目を軽く見開く。

「『黒猫』……」

「お久しぶりです」

対するクロは、涼しい顔。どうやら、刑事さんと知り合いのようだ。

警察の出した死亡推定時刻も、クロの意見と同じく、1～2時間前の犯行ということだった。

「由衣！」

新藤さんが飛び込んで来た。

「あなたは？」

「西川由衣の兄の、新藤武彦です」

よほど急いで来たのだろう、息が上がっている。後ろには、前川さんも一緒だった。

「それでは、全員そろったところで、皆さんに1～2時間前、午後二時から、三時前後、何をしていたのか訊きたいのですが、よろしいですか？」

現場不在証明、アリバイ確認というやつか。

刑事さんに促され、最初に夕希さんが口を開く。

「私は、今回の演奏会の奏者で、ステージでヴァイオリンを弾いていました」

夕希さんのアリバイは、自動的に、その日会場にいた全員が証明してくれる。アリバイとしては、これ以上完璧なものはないだろう。次は、前川さんだ。

「私達　私と、氷^{ひがの}鮑さん、立森さん、小織さんは、会場で夕希さんの演奏を聴いていました。これがそのときのチケットです」
刑事さんは、渋い顔をした。

「西川さんのアリバイは完璧ですな。しかし、前川さん達の分は…身内や友人間のアリバイ証言は、残念ですが、使えません」
「それなら」

口を挟んだのは、クロだ。

「私達の前後左右の席にいた人に、チケットの販売経路などから、電話番号を調べて証言してもらえば問題ありません」

これで、僕らのアリバイは大丈夫だ。

「中に新藤さんのお名前が無かったように思うのですが？」

「俺は、こういう演奏会は苦手なもので、ずっと外にいました」
刑事さんは眉を器用に片方だけつり上げた。

「誰か一緒にいた人はいますか？」

「いえ……一人でした」

「ほう。つまりあなたのアリバイを証明出来る人はいないということですね」

新藤さんが刑事さんに食いかかった。

「どうして俺が妹を殺さなきゃならないんだ！俺はやっていない！断じて！」

「あなたと西川さんは日頃から仲が良くないというじゃありませんか。事件の直前には、激しい口論をしていたと聞きましたが？」

「な……！」

口論をしていて、仲が悪かったのは事実であるから、新藤さんも反論する事は出来ない。

けれど、本当に新藤さんなのだろうか？

少々荒っぽい人という印象は受けるが、実の妹を殺すような人に

は見えないのだが……。

「クロ、どうなんだ？」

刑事さんから離れ、僕はクロに訊ねた。

「事件はパズルみたいに、一つ一つピースをはめていって、初めて全体像が浮き出るものよ」

「例えば？」

「例えば、密室。どうして犯人はこの部屋を密室にしたのか？密室というのは通常、被害者を自殺に見せかけるときに使うものだけれど、今回は明らかに他殺。その上、被害者は絞殺よ。絞殺ならば、上手く首を絞めれば、犯行は一分足らずで十分」

確かに、それは謎だった。鍵がテーブルの上にある状況で、どうやって犯人は部屋から出る事が出来たんだろう？

「私は、犯人が、被害者の遺体が見つかるまで、誰も部屋に入れたくなかったからだと思う」

遺体が見つかるまで？

言い換えれば、被害者が亡くなるまで、誰も部屋に入れたくなかったということだろうか。

どちらにしろ、僕には謎が深まるばかりだ。先に、密室の方法を考えることにした。

「クロ、部屋のドアの下に、通風孔があるよな？」

「ある」

この控え室のドアの下の部分には、通風孔があった。

「部屋を出て鍵をかけた後、紐に鍵を通して、通風孔から出し、テーブルの上の……仮にペットボトルなんかにつっ掛ければ、密室になるんじゃないか？」

「よく見て。鍵には大きなウサギのマスコットが付いてる。あれじゃ通風孔は通らない」

うーん、中々良い線いってると思ったのだが。「密室はあんまり関係ないわ……誰にでも出来るから」

この口ぶり。密室のトリックはもうわかってるのだろうか。

「話は署で聞かせてもらいましょうか」

「だから、俺はやってない！」

クロは、窓から外を覗きこんでいる。ここから見えるのは、駐車場だ。

クロの目が、一瞬見開かれた。

「俺はやってない！身内を殺したりなんか」

新藤さんは、刑事さんに引きずられていった。

僕らは、慌ててそれを追う。着いたのは、駐車場だった。パトカーに乗せるつもりなのだ。パトカーの隣には新藤さんの車が停まっている。

「待ってください」

初めて、クロが刑事さん呼び止めた。

「新藤さん、今日は演奏中、何処に行きましたか？」

「昼飯がまだだったから、それを食べるに……」

「レシートを持っていますか？」

新藤さんは、直ぐ様財布からレシートを取り出した。

「レシートの時間を見て下さい」

ラーメン屋のレシートで、記載されていた時間は、二時半。死亡推定時刻の丁度真ん中だ。

「このラーメン屋は、美味いが、ここからだに行くのに20分はかかるんだ。これでわかるだろ？」

新藤さんは必死でそう言うが、刑事さんの反応は冷たい。

「アリバイ作りの為に、頼んただけで食べなかったのかもしれない」

「それは、あれを見ても？」

クロが、新藤さんの車を指差した。刑事さんの顔が、驚愕の色に染まる。

「これは……！」

フロントガラスに、『駐車違反』のステッカーが貼られていた。駐車違反のステッカーに時刻が書かれてあるのは、周知の事実。

「この通り、時刻はレシートと一致します」

「し、しかし別の場所で駐車違反をしたのかもしれない……」

「何処で駐車違反をしたのかは、警察が一番良く知っているでしょう？ ナンバープレートを言えば、直ぐにアリバイが実証されますよ」

『警察に捕まっていたからこそ、警察に捕まらない』のか。

警察が証人とは、ある意味最も完璧なアリバイと言える。

クロは言い放った。

「これこそ、新藤さんの、不動の現場不在証明です！」

第四話：推理

「それじゃあ全員のアリバイが……」

刑事さんの当惑した声が耳に入る。

クロが言った。

「アリバイは現場不在証明です。ある推理小説の言葉を借りるならば、密室は犯行時に犯人が現場にいたものと、いなかったものの二つだけ。つまり、西川さんが殺されたとき、犯人が現場にいなかったというだけのことです」

ならば、どうやって犯人は西川さんを殺害したんだ ……？

僕らは、再び現場に戻ってきた。

新藤さんは、少しキレ気味だ。まあ、誤認逮捕されそうになった上、中々帰らせてもらえないんじゃないやあ、それも当然とも言えるが。

僕なりに、今回の事件を考えてみる。

床を見ると、さつきと変わらず、水がこぼれていた。

ペットボトルを源に中身が流れていて、扇風機のスイッチの辺りまで濡れている。だが、何故かペットボトルと扇風機の間はあまり濡れていなかった。こんなこぼれ方をするものだろうか。

「クロ、この水変じゃないか？」

クロは頷いた。

「私もそう思う。でも、まだ……」

クロは、悔しそうに眉を寄せたが、すぐに夕希さん達の方へ歩み寄り、突然質問した。

「演奏会の前は何をしていましたか？」

「私は、一人で本番用のドレスに着替えてたわ……この控え室で」
夕希さんが答えた。

「僕は、花屋で夕希さんにあげる花束を作ってもらっていたよ」
そう言ったのは、前川さん。

「おいおい、また事情聴取か？ そうだな…… 由衣と喧嘩をしていたな……」

新藤さんは言って、俯いた。

西川さんの口論は、僕らも耳にしている。

「僕らは、夕希さんの控え室に行こうとして、迷ってたんだよな。
それで、トイレから出てきた夕希さんと会って……」

クロが、弾かれたようにこっちを向いた。

「…… 夕希さんは、手を振って水を切っていたわよね？」

「うん？ 確かな」

どうして、そんな事を訊くのだろう。

「何かわかったのか？」

「解かりそう…… あと少し。 欠片があと少し足りない……」

ミッシング・リンク　かの有名なエルキュール・ポワロでいう
ところの、『最後の環』か。

ブーン、という音と共に、扇風機の涼しい風が頬を撫でた。

「そういえば、この扇風機まだ動いてたのか。 電気代の無駄だよな
ーク……」

クロ、と続けようとした声は、途中で途切れた。 クロがすごい勢
いで僕の肩を掴んでいたからだ。

「何で気づかなかったのかしら。 そう、それよ。 ありがとう、シロ。
最後の欠片が見つかった」

と、いうことは。

「解かったわ」

「解かったって、本当だろうな？」

刑事さんは、疑わしそうな視線をクロに向ける。

「もちろん」

クロは、平然と頷いた。

「まず、犯行当時、西川さんは眠らされていたんだと思います。使ったのはおそらく　クロロホルム」

クロは、ゆっくり夕希さんの方を向く。

「夕希さん、ハンカチを貸して頂けますか？」

夕希さんは、困った顔になった。

「ごめんなさい。今日ハンカチは持ってきてないのよ」

「いいえ、持っている筈です。あなたは、初めに会ったとき、水色のハンカチで汗を拭いていました。しかし、トイレから出てきたあなたは、ハンカチを使わず、手を振って水を切っていました。あのときの服装は本番用のドレス。誤って水で濡らしてしまわないように、普通はハンカチを使いますよね？」

夕希さんの表情が、変わった。

「あのとき、あなたはハンカチにクロロホルムをつけて、西川さんを眠らせ、トリックをセットし、クロロホルムの付いたおそののある手を洗った後だったんです」

「！！」

僕らは言葉を失い、一斉に夕希さんの方を振り返った。

「私じゃないわ。大体どうやってクロロホルムを手に入れたっていうの？」

「一般的なクロロホルムの作り方は、メタンを塩素ガスで塩素化するというものです。けれど、もっと簡単な作り方があるんですよ。エチルアルコールに水とさらし粉を混ぜて、蒸留するんです」

クロは一端言葉を切って、夕希さんを見つめる。対する夕希さんは、首を振った。

「エチルアルコールや、さらし粉なんて、聞いたこともないわ」

「そうでしょうか。エチルアルコールの別名は、エタノール。さら

し粉は、漂白剤のことですよ」

エタノールは、比較的知名度の高い、消毒用などに使うアルコールだ。

理科の実験などにも良く登場するし、音楽室などにも、吹奏楽器の消毒用に置いてある。手に入れるのは簡単だ。

「蒸留が少し難しいかもしれませんが、不可能ではありません。また、……前川さん」

クロは、夕希さんから視線を外し、前川さんと目を合わせた。

「前川さんは、薬学部で勉強中でしたよね？以前、夕希さんにクロホルムの作り方を訊かれた事はありませんか？」

「！」

はっ、としたように、前川さんは口を押さえ、夕希さんの方を向いた。

「でも、方法は？どうやってお母さんを殺したって言うのよ」

「被害者は首を絞められて殺されていました。犯行を手伝った凶器はこの 扇風機です」

「な！？」

僕らは、一様に驚く。扇風機を、どう使ったんだ？

「まず、扇風機のプロペラの根元に、紐をかけて、ひと巻きさせて固定します。それをあらかじめ眠らせた上で、扇風機の前に座らせた西川さんの首に回し、紐の端と端を結び、同じくプロペラの根元に、カッターの刃のような、小さい刃物をつけておくんです」

僕はそよ風を運ぶ、扇風機を凝視した。

そんな怖ろしいことに、この扇風機が使われていたなんて。

「犯人はタイムラグを作るために、スイッチの側に、大きな氷の板を立てておいて、その上に西川さんの腕を置いたんです。ご丁寧に、氷が解けて床が濡れてもばれない様にペットボトルの水を転がしておいて……」

クロは、さきほどの、不自然なこぼれ方をしている水を指差した。「扇風機のスイッチの辺りが濡れています、肝心のペットボトル

との間は、あまり濡れていないでしょう？犯人が、カモフラージュしようとした証拠です」

道理で、奇妙なこぼれ方をしている筈だ。

「時間が経ち、氷が溶けると、落ちた西川さんの腕の重みで、スイッチが押され、扇風機が作動します。すると、首にかけられた紐が捻れ、首が絞まるんです」

それで、扇風機が動いていたのか。でも待てよ、それじゃあ紐が残ってしまうんじゃないか？

「捻れきつたら、プロペラはいったん止まりますが、根本に付けられたカッターの刃に擦れ、何秒か後に紐は自動的に切れます。後は、プロペラが再び動きだし、紐を巻きとって回収してくれる。巧妙なトリックですね」

ちらりと、黙っている夕希さんに、クロは視線を向けた。

「これで密室の謎も解けます。このトリックは、氷の溶けるまでに誰かに部屋に入られて、西川さんを起こされたら台無しになってしまう。だから、誰も入ってこないように、わざわざ鍵をかけたんです。また、自分にアリバイを作るためにもね」

そうか、これがクロの言っていた、『被害者が亡くなるまで部屋に誰も入れなくなかった』訳だな。「このトリックは、割合簡単です。この部屋の鍵は、中からつまみを回せば、閉まるタイプですよ。長い紐を一本用意して、つまみに、回す向きと同じ方向に巻き付けます。五回程巻けばベストですね。そして、ドア下の通風口から外へ紐を出し、外から、紐を引っ張る。すると、つまみが回って、中から鍵がかかる。後は、適当に紐を引っ張って、回収すれば完了です」

夕希さんは、最後にあがいた。

「あの時私は、一人で着替をしていたのよ。流石にお母さんも着替の時はい」

「一人で？」

クロの双鉾が、猫のそのように、鋭く煌めいた。

なら、と口を開く。

「そのドレス、どうやって着たんですか？」

「っ！」

夕希さんのドレスは、背中にチャックが付いているタイプだ。
どんなに頑張っても、一人で着ることは非常に困難なのだ。

おそらく、チャックを閉めてくれ、と西川さん呼び、クロロホルムで眠らせたのだろう。

束の間、この場に沈黙が訪れた。皆、複雑な表情で夕希さんを見ている。

静寂を破ったのは他でもなく、西川夕希だった。

「あはははは、ばれちゃったら仕方ないよね……」

夕希さんは、さもおかしそうに微笑む。

「西川由衣を殺したのは、私よ」

第五話：母親

「どうして、自分の母親を……」

「あんなの、母親なんかじゃないわ」

問いかけた新藤さんに対し、夕希さんは間髪入れずにそう言った。
「二年前、私と小織さんは同じヴァイオリン教室で、競うようにして曲を弾いてた……」

そういえば、同じヴァイオリン教室だった事がきっかけで知り合ったと、小織さんが言っていた。腕に怪我をし、それ以来あまり弾いていないとも。

「小織さんは、天才ヴァイオリニストだった。私も出る次のコンクールで、確実に金賞を取ると期待されていたわ」

夕希さんは腕を震わせ、テーブルに叩きつけた。

「それなのに、あの女は、小織さんがいる所為で私が金賞を取れなくなると思って、わざと小織さんの腕に怪我を負わせたのよ!!」

小織さんの怪我には、そんな理由が。

小織さんは目を伏せ、夕希さんを見つめていた。

「私は、小織さんを慕ってた。本当のお姉さんか　『お母さん』
みたいに　!」

怒りに震える夕希さんの目には、いつしか涙が浮かんでいた。

「あの時、まだ16だった私はなにもすることが出来なかった。小織さんも、私に負担をかけない様に、ってヴァイオリンをやめてしまった……。そして、今回。小織さんが来ると聞いて、私は喜んだわ。それをあの女は……」

「『負け犬の癖に、まだヴァイオリンに未練があるの?』って……
!!!」

夕希さんは叫ぶようにして、そう言った。

「許せなかった。あの女は小織さんを侮辱したのよ！自分で怪我を負わせておきながら！その時に、思った。この女は生きてちゃいけない、って。あの時の私は何も出来なかったけど、今は違う。あの女を殺してやる、って……」

実の姉や、母のように小織さんを慕っていたという、夕希さんはきつと、彼女の事がとても好きだったのだろう。

それは、本当の母親に対しての愛情を、超える程に。

小織さんはそつと、夕希さんに歩み寄り、震える背中を抱きしめた。

「ヴァイオリンを弾けなくなっただのは哀しかったけれど、私はあなたのヴァイオリンを聴くだけで十分だったのに……」

小織さんは、夕希さんにヴァイオリンを渡した。

「弾いて、夕希さん。最後に一回、『あなたのヴァイオリン』を聴かせて……」

「」

物悲しいヴァイオリンの旋律が、空気を伝い、何処までも広い、透けるような空の中に響いた。

第六話：シロの推理

その後、夕希さんは、手錠をかけられ、パトカーに乗せられた。抵抗する様子は、まったくなかった。

「『黒猫』が解決……か」

刑事さんが呟く。

「どうして、『黒猫』なんですか？」

部下の一人が尋ねた。それは、僕も知りたい。

「ああ、何時も黒い服を着ていて、何処からか現れては、事件を解決する。だから、『不吉な黒猫』という意味で……」

「刑事さん」

何時の間にか、僕は刑事さんの言葉を遮っていた。

「別に、事件が起こるのは彼女のせいじゃありません。解決してくれているのに、不吉だとはお門違いもいいところですよ」

にこりと、笑みを添えて僕は言った。

どうして、そんな事を言ったのかはわからない。それも、何時も横目で見て無視するような内容の話に対して。

けれど、何故だか、勝手に口が動いていたんだ。

だって、事件が起きるのはどっちかというと、僕のせいだし。

「シロ」

くい、とクロに、袖を引かれた。

「？どうした？」

「……ありがとう」

何か、礼を言われる様な事したっけ？

まあ、いいか。

「お疲れ様」

謎を解くには、謎を知らなければならない。

犯人を見つけるには、犯人を知らなければならない。

その手口のみならず、理由や、心情まで、全部。

クロには、夕希さんが何を想っていたのか、全て見えていたのだろうか。見なくてもいい部分や、見たくない部分までも。見えないものが見えるというのは、どんな気持ちなんだろう。ともすれば、見えているものまで見失ってしまいそうな、凡人の僕には知る由も無いけれど。

*

「おじゃまします」

あれから、数日。

僕は再び、クロの家へやって来た。誰かに言われて来た訳じゃない。

何となく、あのままクロとずっと別れてしまっただけじゃない気がしたからだ。

とはいえ、本当は同じ学校だから、クロが不登校を止めれば会えるのだけだ。

「いらっしやいませ」

小織さんが返事をしてくれた。

あんな事件があつたにも関わらず、小織さんの様子は事件前と何ら変わりなく見える。

しかし、唯一事件前と変わった所があるとすれば、左手の爪だけが、右手より短くなっていた。

これは、ヴァイオリニストの手だ。

ヴァイオリンをやる人間は、左手で弦をおさえるために、左の爪を短くする事がある。

夕希さんも、そうだった。

「お嬢様に会いに来て下さったんですか？」

「ええ。そうだ、小織さん、チヨコレートは好きですか？」

「申し訳ありません。甘いものは好きなんですが、チヨコレートだけはどうにも苦手です」

「そうなんですか。じゃあ、今度ケーキでも持ってきますね」
そう言って、小織さんと別れ、階段を上がる。

よし。チョコレートが嫌いだという、『最後の確認』が取れた。
階段を上がって直ぐのところにある、黒猫のプレートが掛かった
ドアの前に立つ。

今度は、躊躇しなかった。

「クロ」

クロは常のように、本の山に囲まれて、速読というやつだろうか、
凄い速さで、本を読み進めている。

そして、僕が部屋に入ってきたのに気づくと、直ぐに顔を上げ、
猫のように伸びをした。

こうして見ると、本当に猫っぽい。けれど、『不吉な黒猫』では
決してなく、例えるならば、赤川次郎の三毛猫ホームズの、黒猫版。
自分で推理までしてくれるから、黒猫ホームズの方が優秀かもし
れないぞ。

「今日は、何を持ってきたの？」

僕が持っている紙袋に気づき、そう訊ねてくる。

僕は、にやりと笑った。

「お前の好きなものだよ」

クロは訝りながら、紙袋を受け取り、中身を覗いた。

「これは……」

中に入っていたのは、『きのこの山』。

「好きだろ？」

「何で」

クロは目を丸くする。

「最初にここに来たとき、ケーキを冷蔵庫に入れに行った？その
時に、きのこの山が三箱も入っているのを見かけて。最初は別の
人かと思ったけど、よく聞いて見れば、小織さんはチョコレートが
苦手だし、氷^{ひがの}鮑さん　クロのお母さんだって、チョコレートは好
きかもしれないけれど、仕事が忙しいから、せめて一箱づつで、三

箱も一気に買う事は無いと思う。そうしたら、消去法で、あとはクロしかない。三箱も買うという事は、よほど好きだという証拠だ。それに、お前は、『生クリームが嫌い』と言ったけど、『甘いものが嫌い』とは言っていないからな」

QED（証明終了）。

クロの推理には劣るかもしれないが、僕なりに考えた結果だ。

だから、今度は僕が訊いて見ることにする。

「当たり？」

「……正解」

クロは、『きのこの山』を食べ始めた。

良かった、合ってた。

これは、僕がクロのことを『知った』から、導き出た結論なのだろうか。

夕希さんの件で、推理によってクロは辛い思いをしたかもしれないけれど、推理にはこんな使い方もある。

クロは授かったその能力を、自分や他人が幸せになるために使えばいい。

「僕が、事件召喚体質で呼んだ事件を、クロが推理する。これって、中々いいコンビじゃないか？」

少し、ふと思った事を言ってみる。

すると、クロが微かに、微笑ったような気がした。

僕がそのまま食べる様子を見てみると、無言でこっちに箱を差し出してきた。僕も食べて良いということだろうか。

いや、しかし僕は辛党で、けして甘党ではなく、辛いものが好きであって、甘いものは苦手なわけで……。

「いただきます」

気づくと、僕はそれを口に入れていた。

口の奥でほどけるチョコレートはやはり、甘かった。

けれど、けして不味くはなく、ほどよい甘さだ。

たまにはチョコレートもいいかもしれない。

第六話：シロの推理（後書き）

ここまで読んでくださり、どうもありがとうございました。ようやく、完結です。

実は、連載小説を完結させたのはこれが始めてだったりします。また、クロとシロのコンビで続編を書けたらなーと思っておりますので、その時にはどうかまたお付き合いくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8858a/>

Detective Cat

2010年10月8日15時27分発行